

# サッカーの戦術の発展と現代サッカーの戦術

佐藤 亮平<sup>1)</sup> 竹田 唯史<sup>2)</sup>

## 1. 緒言

サッカーの指導場面を見ていると選手の特性を生かした指導や指導者の熱意ある指導により、効果的な指導がされている一方で、指導者の経験のみに頼った指導や選手に指導者の考えを押し付ける方法、技能レベルの高い選手ばかりに注目し、下手な選手への対応をおろそかにしてしまう指導などが見られる。その様なことから、筆者は誰もがサッカーというスポーツの面白さを実感し上達するような指導理論を作成したいと考えた。

学校体育研究同志会は、できない子を大切に、すべての子どもたちが「運動文化」の特質に触れ、その技術を「わかる」、「できる」ことを目的として多くの種目における独自の指導理論を展開してきた。学校体育研究同志会は、「運動文化（教材）の基礎技術を明確にするために、それぞれの教材特質を技術的観点から把握する必要がある」（荒木, 1974, p.53）とし、「技術的特質」を規定している。「技術的特質」とは、「それぞれの運動文化が持っている『面白さや持ち味』ということ」であり、「他の種目（教材）にないその種目独自の技術的な特性（本質）である」（荒木, 1974, p.53）と規定している。

また、進藤（2003）、竹田（2010）らは、この学校体育研究同志会の考え方を基礎として、高村（1987）の教授学理論を組み込み、独自のスポーツ指導理論構成方法を提起している。そこにおいては、指導対象となるスポーツの歴史的発展を考察し、そのスポーツ独自の面白さであり技術を発展させる要因となる「技術的特質」を明らかにしたうえでそのスポーツの技術・戦術を構造化して捉える。そして、学習者の技能レベルや技術習得の発展段階を考慮した指導理論を構成し、誰もが指導可能な「教授プログラム」を作成するものである。

そこで本論では、これらの研究方法に基づきサッカーの指導理論を構築するための基礎的作業として、サッカーの技術的特質を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

研究方法は、サッカーの技術・戦術の歴史的発展を検討し、サッカーの技術・戦術を発展させる要因を先行研究の検討に基づき明らかにする。そして、サッカーの面白さであり、技術を発展させる要因である「技術的特質」を明らかにする。その際の先行研究として「技術的特質」を明らかにしている学校体育研究同志会（1975）、その理論に基づき独自の視点からサッカーの技術的特質を提起した伊藤（2005）の理論を取り上げる。それらの検討に基づき筆者独自の技術的特質を提起する。

## 3. 結果

### (1) サッカーの歴史的発展の考察

サッカーの歴史的発展を先行研究（二宮・バイスバイラー, 1972；長池, 1973；多和, 1974；山中, 1984）を参考にし、イギリスにおいてフットボール協会が設立した1863年以降のサッカーのシステムと戦術の変遷について考察する。システムの区分に関しては、山中（1984）の論述に依拠しオフサイド・ルールの改正の年代に基づき、1863年～1867年は「ドリブル戦法」、1867年～1925年は「キックアンドラッシュ」、1925年～現在では、「WMシステム」「4-2-4システム」「4-3-3システム」「4-4-2システム」と分類した（山中, 1984, pp.19-20）。

「ドリブル戦法」の攻撃では、ボールを中心にその周りを取り囲むようにしてのマスドリブルで攻め入り、相手ゴールを狙った。守備においても、こぼれたボールを前に蹴り返すものであった（多和, 1974, p.96）。

「キックアンドラッシュ」の攻撃は味方のバックスはロングキックで大きく相手陣や相手ゴール前にボールを送り、フォワードは相手ゴール前に送られたボールに突進していき、相手プレーヤーとの競り合いに勝って、得点を狙うものであった。一方、守備に関しては「ドリブル戦法」時の守備の人数では対応が困難

になったため人数を増やした（多和, 1974, p.98）.

「WMシステム」の攻撃はセンターフォワードと両アウトサイド（ウイング）の3名が前方に位置し、両インサイド（インナー）の2名がやや後方に位置する。このようにW字型となることによって、フォワード間のパスが多様化し変化に富んだパスワークが可能となった。守備に関しては、スリーバックシステムによるマンツーマンディフェンスの誕生が挙げられる（多和, 1974, pp.107-108）.

「4-2-4システム」は、4人のバックと4人のフォワードの間に、攻撃の起点となり守備の第一線となる2人のプレーヤーを配置する布陣である。攻撃は、積極的なポジションチェンジを交えながら、パスワークで相手守備陣を崩す。守備に関しては、マンツーマンディフェンスとゾーンディフェンスを併用することによる厚い守備であった。（多和, 1974, pp.111-112）.

「4-3-3システム」の攻撃は、相手に攻め込ませておいての速攻、ウイングからの攻撃、オーバーラップ、セカンドラインからのシュートといった戦術が挙げられ、守備に関しては、フォワードの守備による相手の攻撃を遅らせる事、中盤とフォワードによるゾーンディフェンス、ゾーンディフェンスとマンツーマンディフェンスの併用、スウィーパーによる守備とゾーンによる最終ラインが挙げられている（二宮・バイスパイラー, 1972, pp.48-59）.

「4-4-2システム」は「4-3-3システム」以上に運動量が要求されるシステムである。攻撃は、フォワードの2人による個人技能を生かした突破やオーバーラップを使ったチーム全体による攻撃の方法であった。守備に関しては、4人のバックと中盤の4人とゴールキーパーによる9人での守備が挙げられる（二宮・バイスパイラー, 1972, pp.40-42; 長池, 1973, p.232）.

このようにサッカーのシステム・戦術は発展してきたが、その発展の要因となるものとして、多和（1974）は、「守備の増強と攻撃の強化」とし、個人技術の向上やコンビネーションプレーの強化、フォーメーションプレーの進歩により攻撃の強化を生み、それに対抗するために守備はゾーンディフェンスからマンツーマンディフェンスを採用し、さらにはフリーな守備者という役割を持ったスウィーパーを置いてより守備を増強しようとした（多和, 1974, p.116）。また、「ルールの改正が戦法や戦術・技術に対しても影響力を持っている」とし、オフサイド・ルールの改正によ

りツーバックからスリーバックシステムに移行したようにルール改正が「必然的に技術・戦術への進歩向上をうながし、近代サッカーへの緒を開いたとみることができる」と述べている（多和, 1974, p.116）。また、「システムを生かすのは戦術であり、戦術を支える技術である」として、「システムを変えてきたのは戦術の進歩である。個人の戦術的プレー、グループでの戦術的プレーの進歩によって、攻撃面では広範囲なポジションチェンジや速攻を可能にするパスワークなどによって強化され、守備の人数を増員により堅固になった守備陣を崩すためにツートップのフォワードラインが考えられたり、バックの攻撃参加を強要するようになってきたとみることができる」とし、さらに「高い戦術的プレーの習得、このような戦術的プレーを可能にする個人の技術の習得がシステムの基礎である」と述べ、システム、戦術、技術の相互関連性について述べている（多和, 1974, p.118）.

山中（1984）は、サッカーのシステム・戦術が発展してきた要因として、「ルールの改正」、「ボールテクニックの向上」、「プレイのスピード」を挙げている。「ルールの改正」、「ボールテクニックの向上」の関係について「オフサイド・ルールが変わったことがきっかけとなり、選手の配置の仕方や戦法が変わり、そこで用いられる技術も多彩になった」として、「ルールの改正」と「ボールテクニックの向上」に「因果関係」があると述べている（山中, 1984, p.20）。また、「キック、トラッピング、ドリブルなどの技術が次第に向上」といった「ボールテクニックの向上」が、「ショートパス戦法」を誕生させたとし、技術の向上が新たなシステムや戦術の出現に寄与していると述べている（山中, 1984, p.20）。また、攻撃と守備の関係は攻撃力が優勢になることに対して、守備のシステムを変化させて対抗してきた。そのシステムに影響を与える要因として「プレイのスピード」を挙げ、その内容を①ランニングスピードとその変化、②ボールコントロールのスピードとその変化、③パスのスピードとその変化、④判断の質（シンキング）とそのスピードの4つを挙げている（山中, 1984, p.20）.

このシステム・戦術の発展の要因についての両氏の論述をまとめると、「ルールの改正」がきっかけとなり「技術・戦術の発展」を促し、個人の技術的進歩が新たな攻撃・守備戦術の実行を可能にした。また、攻撃力が優勢となることに対して、守備の向上のために「システムの変更」を促している。そして、システムや戦術が均衡化した際には、それを打開するために

「プレイスピードの向上」が影響を与えている。以上のことから「ルールの改正」、「システム」、「戦術」、「技術」の発展が相互関連しながら発展してきたといえる。

## (2) サッカーにおける技術的特質

学校体育研究同志会（1975）は、あれこれの技術を習得したからサッカーができるようになったと考えずに、サッカーをサッカーらしくしている技術（いろいろな技術がある中で、最も中心的な技術）を中心に、練習内容を考えなければならないと述べ、サッカーの技術的特質を「コンビネーションを含むシュート」と規定した（学校体育研究同志会、1975、p.19）。これは、単にボールコントロールやキック技術が上達することのみで、サッカーの本質的な楽しさを感じることができないという立場に立ち、いつ、どこに、どのような強さで、パスを出すか、パスをもらうのかといったコンビネーションによってシュートすることがサッカーの本質であると捉えている。

ここで、得点を奪うために必要なシュートを技術的特質に位置付けている点は評価できる。また、個人技術と戦術の関連を的確に捉え、コンビネーションも技術的特質に位置付けていることも評価できる。しかし、防御に関する記述が技術的特質に位置付けていないことやコンビネーションをどこで使うのかという場所に関する具体的な記述がないことも問題点であると考ええる。

伊藤（2005）はサッカーの技術的特質を「システムにおける自分の役割の認識と、フィールド上において相手からプレッシャーを受けず自由にプレーすることのできる『フリースペース』の奪い合い」にあると規定した（伊藤、2005、p.6）。

ここで、「フリースペース」という概念を技術的特質に位置付けていることは評価できる。その理由は、「フリースペース」を使いプレーすることにより、プレーの成功率を高める事ができるからである。しかし、実際の試合場面においては、常に相手はボールを奪いにくるし、パスを選択しても味方にマークがいる。そのため常時フリーな状態で、プレーし続けることは不可能である。

また、得点を奪うために必要なシュートの記述がないことも改善点であり、さらに学校体育研究同志会（1975）同様に、伊藤（2005）の技術的特質に関してもフリースペースをどこに作るのかという「場所」の記述が不足している。

以上のことを踏まえ、筆者はサッカーの技術的特質を「主に足でボールを操作し、攻撃側は、チームとして『重要空間』にボールを運びそこからのシュートを目指す。守備側はそれを防ぐ」とする。「重要空間」とは学校体育研究同志会（1977）球技分科会において「最もシュートが入れやすい場所（シュートし易い領域）」と規定した概念である（荒木、2004、p.227）。

筆者はサッカーにおける「重要空間」は、ペナルティーエリアが該当すると考えた。この背景には、2004年のJリーグにおいてペナルティーエリア内からのシュートが、全体のゴールの85パーセントを占めていることからもうかがえる（Jリーグ、2004）。また、「重要空間」を設定することで、攻撃はどこにボールを運ばよいかを理解でき、逆に守備側は、どこにボールを入れられたら失点の可能性が高まるのかということを理解できる。サッカーはゴールを奪う - 守ることを目指しているが、ゴールを決めるための場所、決められやすい場所を明確にすることで、選手自身のプレーの目的が明確になり、プレーの方向づけが可能となる。例えば、攻撃ならば、いかにして「重要空間」からシュートするか、守備ならば、いかに「重要空間」にボールを入れさせないか等である。

また、どのように「重要空間」に向かうかの最終的な判断は選手に任されている。選手はこの判断を通じて、自己の技能と相手の技能を比較し、どういったプレーが最善の方法なのかを選択するという事が必然的に必要となる。これにより、ボール保持者はもちろん、周りのプレーをサポートする選手も状況判断を求められる。これが、自チームや相手チームとの技術的・戦術的能力差を考えて攻撃を組み立てられ、逆に守備側は、技術的・戦術的差をチームとしてどう埋めていかなければいけないのかということを考える契機となる。さらに試合時間や試合環境（点差・気温・人数・残りの体力など）といったことの影響面を含んだ判断が可能になると考える。

## 4. まとめ

本論では、サッカーの歴史的発展について先行研究（二宮・バイスパイラー、1972；長池、1973；多和、1974；山中、1984）を参考にし、システム・戦術の変遷について考察した。その上でサッカーの技術的特質として「主に足でボールを操作し、攻撃側は、チームとして『重要空間』にボールを運びそこからのシュートを目指す。守備側はそれを防ぐ」と提起した。今後

は、サッカーの技術・戦術構造の構造を明らかにし、指導理論を展開することが課題である。

## 文 献

- 荒木 豊 (1974) 内容・技術. 学校体育研究同志会編 体育実践論. ベースボールマガジン社:東京. pp.35-82.
- 荒木 豊 (2004) バスケットボールにおける「2対0」理論について. 学校体育研究同志会創立50周年記念誌編集委員会編 体育実践とヒューマニズム. 創文企画:東京. pp.222-227.
- 学校体育研究同志会 (1975) サッカーの指導. ベースボールマガジン社:東京.
- 伊藤 烈 (2005) サッカーにおける初心者を対象とした指導理論について. 北海道浅井学園大学大学院生涯学習研究科修士論文.
- Jリーグ公式サイト:2004 OPTA. <http://www.j-league.or.jp/2004opta/keikou/08.html>.
- 長池 実 (1973) サッカー教室. 大修館書店:東京.
- 二宮 寛・ヘネスバイスバイラー (1972) サッカーの戦術. 講談社:東京.
- 進藤省次郎 (2003) バレーボールの初心者に対するバスの技術指導. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89:53-72.
- 高村泰雄 (1987) 物理教授法の研究—授業諸方式による学習指導方の改善—. 北海道大学図書刊行会:札幌.
- 竹田唯史 (2010) スキー運動における技術指導に関する研究—初心者から上級者までの教授プログラム—. 共同文化社:札幌.
- 山中邦夫 (1984) 技術・戦術の発展とシステムの変遷. 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編. 現代体育・スポーツ大系, 24. 講談社:東京. pp.19-26.